書評
Kaie Mochizuki and Byungkon Kim (eds.), *Bibliography of the Studies on the Saddharmapuṇḍarīkasūtra (1844-2020)*, Lotus Sutra Studies I

石　田　智　宏

本書は、1844年から2020年までの間に国内外で出版された法華経に関する編著書・研究論文の目録（英文）である。類書がない中で待望の書といえよう。発行元の国際日蓮学研究所は、2017年に東洋文化研究所から改組された身延山大学の附置研究所で、法華経研究の拠点となるべく法華経研究叢書を刊行することとし、本書はその第１巻となる。

これまで法華経についての研究文献目録は、まとまったものとしては梵文テキストの研究に関する湯山目録[1]があるくらいで、法華経の思想や文化について何かを知りたいと思ったとき、そのテーマについてすでに何らかの研究があるのかないのか、どんな研究があるのかを知ろうとしても、法華経に関する研究の全体にわたる文献目録はなかった。近年出版されたBrill 仏教百科事典の法華経の項では、そうした欲求に対して信頼のおける情報を提供したいという編者の思いから、この種の辞典としては詳細な120余の文献書誌を掲載しているが[2]、あくまで辞典の一項に収まる分量にとどまっている。

法華経のように、古代から現在までの長期間にわたってアジアの広い地域で伝承された経典については、その過程で各地域における思想・文化的発展があり、関連する研究文献も膨大な量にのぼる。また近代以降は西洋をはじめ世界各地で関心がもたれるようになり、法華経の研究は世界規模で蓄積されているから、インターネットを活用できるとしてもそのすべてを把握することは容易ではない。法華経と同じように広く関心を集めてきた経典は他にもあるが、ひとつの経典に関して本書ほど広範囲な領域にわたる研究文献を収めた目録は例がないであろう[3]。

この文献目録のページをめくると、まずこれまでに蓄積された研究の量に圧倒

されるが、お目当ての著者の論文を探すのに便利であるとともに、こんな著書・論文があったのかという発見もある。

本書は1998年に発行された私家版の改訂版であるが、私家版に比べて採録する文献の年代を大幅に拡げた。すなわち、私家版が1980－97年の17年間に出版された研究書、約650点（そのうち欧文約100）を収録するのに対し、今作は1844－2020年の約180年間の研究に対象を広げた結果、採録文献数は大幅に増え、和文約4,800、欧文約740、中国語文献約370、韓国語文献約500、計6,400点余、約10倍となっている。しかも著者名および使用言語をみると、法華経の研究がじつにインターナショナルなものとなっていることに改めて気づく。

ところでいま採録対象年を拡大したといったが、その採録方針は単に出版年を遡らせただけではなく、収録文献を1844年以降のものとしていることに注目したい。というのは、本書に収録する文献を法華経そのものに関する研究に限定するなら、スタートの年号は、現代における法華経研究の先駆となったビュルヌフが法華経の現代初訳を出版した1852年になるはずだからである。ここでの採録基準初年となる1844年は、ヨーロッパにおける仏教研究黎明期の名著『インド仏教史序説』[4]の出版年であり、そのことに編者の意図を汲みとることができよう。

近代の仏教研究者は、ネパール駐在のイギリス公使ホジソンの報によりはじめて梵語仏典写本の存在を知ることとなった。真っ先にそれを受け取ったビュルヌフは、写本の束の中に法華経を見つけると集中してその研究に取り組み、『インド仏教史序説』の中にその研究成果を盛り込んだ。この本はおそらく西洋近代において初めて法華経の特徴と仏教史におけるその重要性について述べたものであり、その中で法華経仏訳の出版も予告されている[5]。今回出版する文献目録がこの『序説』の出版年を採録初年としていることは、本書が法華経の文化的位置づけを視野に入れ、仏教伝播の歴史において法華経と関係する研究を広く採録しようという姿勢を示しているように思える。つまり私家版がほぼ文献・思想研究の文献のみを採録していたのに対して、本書は狭義の法華経研究の著作に加えて、法華経の伝承を理解するための関連文献を広汎に採録することにより、はじめての法華経総合文献目録になったといえるであろう。

さて本書の中心は文献目録であるが、それに先立ち“A Brief History of the

Lotus Sutra Studies”（「法華経研究略史」、以下「研究略史」とする）と、梵・蔵・漢の原典からの現代語訳一覧が添えられている。この「研究略史」は、本書の編集主幹である望月海慧博士が2016年に韓国・東国大学校にて行った講演録に基づくもので、法華経のテキスト・注釈・思想を中心とした研究史である。その前半では法華経の１．梵語写本、２．言語学的研究、３．成立論、４．思想、の各分野の研究史について、後半では法華経が伝わったインド・チベット・内陸アジア・中国・韓国・日本、という各地域における法華経研究について述べ、最後に現代語訳と近年の研究を紹介している。

文献目録ではそれらに加えて、法華経に関説した仏教概論・仏教史の類のほか、タイトルからは法華経関連文献であるとは予想されにくいものであっても法華経を深く理解するために必要と考えられる文献、さらに法華経が生み出した美術・文学・儀礼・信仰・芸能・習俗に関する研究までを広く採録し、全体として法華経とそれに関係する文化を理解するためのあらゆる著作を収めようという方針が窺える。

以下には本書に収録された文献をおおまかに分類し、その概要を紹介したい。なおここに言及する文献は、あくまでも筆者の目にとまったものを取り上げていることをご了承いただきたい。

まず法華経そのものとその研究文献。これには梵語写本やその校訂本およびそれらに関連する原典の研究と、古代・中世の漢・蔵・蒙語訳や現代西洋諸語などの翻訳がある。また関連分野として原典・翻訳の言語学的研究があげられる。この分野に属するものとして各種写本集成も採録される。各地で発見された法華経の写本は、単独で出版されるだけでなく、出土地や発見者、または所蔵者ごとのコレクションの一部として出版されることも多く、写本集成とはそのような写本資料のことである。集成の中に法華経や関連資料が収められている場合、法華経研究に不可欠な基本文献となり、最も近年にバーミヤン近郊で発見された法華経の梵語写本を収録した『スコイエンコレクション写本集成[6]』などがこれにあたる。また写本資料集の目録が各種採録されているが、ここでは法華経の敦煌写本を掲載する『ペリオ蒐集敦煌漢語写本カタログ[7]』をあげておこう。このほか古代内陸アジア諸語に翻訳された法華経に関するものとして、コータン語、モンゴル語や

ウイグル語の諸資料、およびそれら各言語に関する研究もこの分野の資料・著作といえよう。

以上のような法華経そのもの（原典・翻訳）とその文献研究に加え、この目録ではメタ情報として近・現代において写本収集や校訂・翻訳・出版などの活動に関わった人物に関する研究も収める。また漢訳に関しては石経の研究、古代・中世の写本や版本の制作・伝承に関わる研究も収録される。

次に法華経の諸注釈をはじめ各国で展開した法華思想の研究。この分野としては智顗・吉蔵から最澄・日蓮および近現代までの高僧や東アジアにおける関連各宗派の教学および教団（史）の研究、聖徳太子をはじめ朝廷・貴族から信仰者たちに関する研究が挙げられる。中国に関しては中国撰述の法華経註釈文献の研究はもちろん、天台宗・天台教学に関する諸研究が含まれる。また編者は中国の全体的な仏教史も視野に入れており、たとえば任継愈『定本　中国仏教史』や竺沙雅章『宋元仏教文化史研究』などを採録する。日本における法華経受容の歴史についての論攷も数多く採取されるが、中には古代・中世日本における法華経の政治的影響について考察した研究成果もあり、頼朝と後継者たちの法華経への傾倒を吾妻鏡から読み解く論文[8]が拾われていたりして、採録がいかに幅広く行われているかが窺われる。また日本における高僧の法華経観に関する諸論文、近年の平岡聡『南無阿弥陀仏と南無妙法蓮華経』のように名僧の法華経観を比較思想的に扱う著作も見られる。日蓮教学・教団史に関する著作も多く含まれている。

法華経とその他の経論、および禅や浄土思想との関係を論じたものはもちろん、仏教以外の諸思想との関係を論じた研究もとりあげられる。この分野のものとしては般若経や浄土経典、華厳思想などに関する著作、高崎直道『如来像思想の形成』、下田正弘『涅槃経の研究』やミヒャエル・ツイマーマン『内在する仏：如来蔵経[9]』をはじめとする如来蔵思想に関する著書などが含まれる。注意を引くところでは五島清隆「チベット訳『宝筐経』：和訳と訳注」に触れておこう。宝筐経には、法華経と類似の比喩がみられたり発想の共通性があるかと思えば対照的要素もあり、法華経の研究にとって重要な経典といえるからである。これら個別の経・論のほか、ヴィンテルニッツ『インド文献史』（第2巻仏教・ジャイナ教[10]）をはじめとして平川彰『初期大乗仏教の研究』やポール・ウイリアムズ『大乗仏教[11]』な

ど、大乗経典の成立と展開を俯瞰的に考察した諸研究も収められている。

以上は文献中心の研究であるが、本書ではこの他に各地域・各時代に展開した美術・文学・儀礼・信仰・芸能・習俗など、法華経により形づくられた多くの文化事象についての著書・論文が収められる。美術に関するものとしてはアフガニスタンや中国における二仏並坐の造形作品をテーマとした諸論文、装飾法華経や法華経曼荼羅に関する諸論考を挙げることができる。近年の原口志津子『富山・本法寺蔵　法華経曼荼羅図の研究』に関しては、それを元に企画された展覧会の冊子も取り上げられているが、そこではとくに民俗学的観点から法華経曼荼羅が捉えられており、法華経をとりまく文化の広がりまでも視野にいれようとする編者の方針をよく表しているといえるであろう。文学関連では、各種応験記など法華経の説話文学や宮沢賢治などに関する研究、芸能関連では幸若舞や舞曲などに関する研究、儀礼に関しては法華懺法などに関する研究、信仰・習俗の分野では法華信仰に基づく祭りや年中行事に関する諸論考などが含まれている。

以上のように本書はまことに広い領域の研究文献をとりあげており、よくここまで拾ったなというのが率直な感想である。現状では収録された文献はアルファベット順に配置された著者名のもとに発行順に配列されており、項目分類をしていないから著者名をたよりに探索しなければならないが、それでも広範囲に法華経に関係する著作を拾っているから、様々な発見があることはまちがいない。

編者によればこの目録は将来的には Web 上で随時アップデートされるとのことであるから、その際には更なる利便性をはかるため、ジャンル別検索やキーワード検索ができるようになることを期待したい。

最後に、本書を編む労を多としながら気になる点は、中国・韓国出版文献と和・洋文献の採録基準にやや統一感を欠くように思われることである。情報としてのバランスから欲をいえば、『敦煌大蔵経』（全63冊）や『韓国仏教学研究叢書』（全158冊）を採録するならば、その他の大蔵経や『大日本仏教全書』などの基本的叢書も採録し、法華経に関係する巻を特記すると便利であろう。また『大蔵経全解説大事典』を掲載するのであれば法華経を扱う辞典類もあわせて別項としてまとめられていると、初学者にとっても親切な目録となるのではなかろうか。

なお本書は現在、Academia.edu よりダウンロードできる。

註

＊本文では洋書タイトルは私に和訳し、著者名と原タイトルのみ注記した。本稿は文献目録の書評のため、目録に採録されている著作の書誌情報は目録参照。

1　Akira Yuyama, *A Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra.*

2　Jonathan Silk et al., *Brill's Encyclopedia of Buddhism, Volume I, Literature and Languages*, Leiden（Brill）2015, pp. 155-157. 本目録は出版年を2016とするが誤植である。

3　たとえば般若経についてはPierre Beautrix（ed.），*Bibliographie de la littérature Prajñāpāramitā," Publications de l'institut Belge des Hautes Études Bouddhiques, Série Bibliographies,* no. 3, Bruxelles 1971; Edward Conze, *The Prajñāpāramitā Literature*, The Hague 1960（2nd ed.: Tokyo 1978）; 神仁・高野正宏・長島尚道（編）「般若経典類研究書籍・論文目録」『般若波羅蜜多思想論集：真野龍海博士頌寿記念論文集』真野龍海博士頌寿記念論文集刊行会編、山喜房仏書林 1992, pp. 251-306があるが、いずれも文献・思想研究が中心である。なおStefano Zacchettiによる最新の目録が、前掲注２の *Brill's Encyclopedia of Buddhism,* Volume I, pp. 203-209に含まれている。

4　Eugène Burnouf, *Introduction a l'histoire du buddhisme indien*. 英訳として *Introduction to the history of Indian Buddhism*, tr. by Katia Buffetrille and Donald S. Lopez. Jr., Chicago & London（The University of Chicago Press）2010がある。 本書の中外日報における書評（2020. 11. 24）が法華経のビュルヌフによる仏訳の出版年を1844年とするのは誤まりで、正しくは1852年である。

5　湯山明「ビュルヌーフの法華経研究の学史的周辺――近代印度学仏教学の最初期を飾る人々――」

6　Braarvig, Jens（ed.），*Manuscripts in the Schøyen Collection III: Buddhist Manuscripts, Volume II.*

7　Bibliothèque nationale de France, *Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-Houang: Fonds Pelliot chinois*, volume I, III － VI.

8　Martin Collcutt, "Religion in the Formation of the Kamakura Bakufu : As Seen through the Azuma kagami."

9　Michael Zimmermann, *A Buddha Within: The Tathāgatagarbhasūtra, The Earliest Exposition of the Buddha-Nature Teaching in India.*

10　Moritz Maurice Winternitz, *A History of Indian Literature, vol. 2: Buddhist Literature and Jaina Literature*（原著は *Geshichte der Indischen Literatur, Band 2, Die Buddhistische Literatur und die Heiligen Texte der Jainas*, Leipzig 1920, repr. Stuttgart 1968）.

11　Paul Williams, *Mahāyāna Buddhism*. 本書採録のWilliamは誤植。